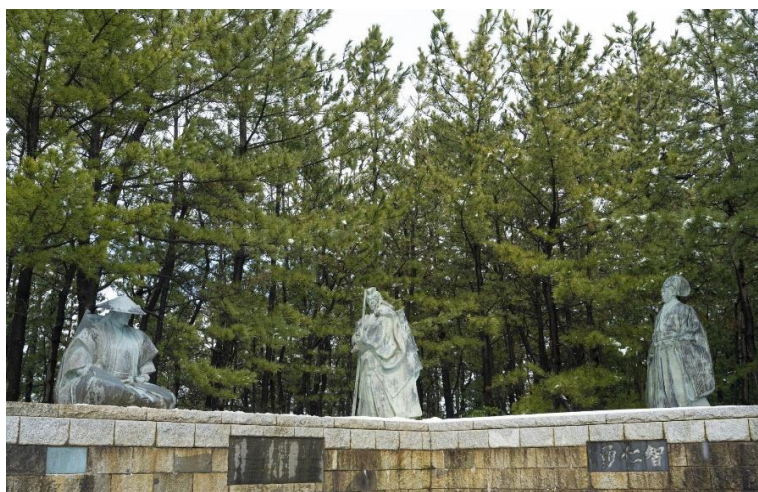


第1分科会 家庭教育

会 場 石川県小松市團十郎芸術劇場 うらら

日 程 12:00 ~ 受付
12:50 ~ 13:00 歓迎口上
13:00 ~ 13:30 開会行事
13:30 ~ 15:10 基調講演
15:10 ~ 15:20 休憩
15:20 ~ 16:50 パネルディスカッション
16:50 ~ 17:00 閉会行事
17:00 終了



安宅の関 ©石川県観光連盟

祝 辞



小松市長

宮橋 勝栄

「第73回日本PTA全国研究大会石川大会」が盛大に開催されますことを心よりお祝い申し上げます。また、公益社団法人日本PTA全国協議会をはじめ、関係者の皆様におかれましては、青少年の健全育成および学校・家庭・地域の連携推進にご尽力いただいておりますことに、改めて感謝と敬意を表します。

さて、小松市は、歌舞伎の代表的演目「勧進帳」の舞台として知られる「安宅の関」を有し、「歌舞伎のまち」として全国に発信しています。毎年5月の「お旅まつり」では、小学生が「曳山」の上で歌舞伎を演じる「曳山子供歌舞伎」が行われ、さらに秋には、市内の中学校が毎年持ち回りで「勧進帳」を上演する「中学校古典教室」が昭和61年から続いています。いずれも、主役は子どもたち。子どもたちの「力」がなければ成しえないのが特徴です。

歌舞伎に触れる経験は、子どもたちが地域の伝統を学び、郷土愛が醸成される貴重な機会となるとともに、厳しい稽古の中で、礼儀作法を身に付け、周りの人たちへの感謝の気持ちが育まれる場でもあります。また、「勧進帳」の「智・仁・勇」の精神を学ぶことは、道徳教育の一環としても意義深く、子どもたちの健全な成長に寄与しています。

近年、少子高齢化や環境問題、デジタル化の急速な進展など、社会は大きく変化しています。また、地震や大雨災害などの自然災害が毎年のように発生し、子どもたちや家庭にも大小さまざまな影響を与えています。このような不確実な時代だからこそ、子どもたちには、時代の変化を乗り越え、力強く歩む力が求められています。その核となる人間性を育む機会として、学校教育だけでなく、スポーツや文化活動、ボランティアなど、多様な経験の積み重ねが必要であり、そのためには、地域の協働やコミュニティの強化、地域のつながりがより一層重要となっています。

本大会を通じて、地域を超えた交流から多様な意見やアイデアが生まれ、子どもや家庭にまつわる諸課題の解決「難関突破」につながることを心より期待しています。

結びに、公益社団法人日本PTA全国協議会、東海北陸ブロックPTA協議会、そして石川県PTA連合会の今後のますますの御発展と、関係者の皆様の御健勝並びに御活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

研究課題

子供の意欲を高める家庭教育

～ 子供は家でこそわがままであれ ～

現状と課題

現代社会において、家庭教育の重要性はますます高まっています。急速な技術革新やグローバル化が進む中、子どもたちはかつてないほど多様な情報や価値観に触れる機会を持つ一方で、これに伴う混乱や不安も抱えやすくなっています。そんな時代だからこそ、家庭が果たすべき役割が極めて重要です。皆さんで家庭教育の重要性について、どのように取り組んでいけば良いかを学びましょう。

討議の視点

- ① 不登校やいじめ、非行問題についての要因
- ② 青少年更生の視点から見た、問題行動を起こした子供の本質
- ③ 諸所の問題の、家庭教育の視点からの考察
- ④ 保護者、PTA、教育現場、更生現場の各視点から家庭教育を考える

提言者

- 基調講演者 佐藤 健司 氏 法務少年支援センター仙台 所長
(仙台少年鑑別所)
- コーディネーター 米原 由紀子 氏 とやまアナウンスアカデミー講師
- パネリスト 佐藤 健司 氏 基調講演者
後藤 豊郎 氏 前日本PTA全国協議会会長
横山 えり 氏 札幌市八条中学校PTA会長
下木 良子 氏 公認心理師 特別支援教育士 臨床発達心理士

基調講演 「子供は家でこそわがままであれ」

パネリストとしてもご参加いただきます



佐藤 健司 氏

法務少年支援センター仙台（仙台少年鑑別所）
所長

経 歴 :

平成4年法務省矯正局所管 仙台少年鑑別所 に拝命、
以後、北は札幌少年鑑別所、西は広島少年鑑別所まで、全国の刑務所、少年鑑別
所で法務技官（心理職）として勤務し、令和7年3月まで金沢少年鑑別所に所
属、同年4月から現勤務地で勤務している。

講演要旨 :

非行の専門家の視点から不登校について論じる。

非行は、本来期待されるような子どもらしい安心した生活体験が得られず、むしろ被害体験等により生きづらさを抱えて困っていることが背景にあり、大人からの適切な支援を求められずに問題行動を発現するメカニズムがある。つまり、「困っている人」が、「周囲を困らせる人」になる。不登校は、ほとんどの場合、学校や友だちに自分が受け入れられている実感の乏しさや、周りと同等に振る舞えそうにない不安があって困っていることが背景にあると考えており、不登校が始まると、学校や親の意向に沿えていないことへの後ろめたさや緊張感もあり、大人に支援を求めにくいという点で非行と共通している。教室以外の場や家が安心して過ごせる場所であればよいが、居場所がなくなると非行に転じる危険性がある。不登校を何らかの問題行動と捉えるよりも、問題行動の兆候と捉えることが肝要である。

講演要旨（続く） :

不登校への対応に係る学校や保護者の留意点に関する私見を、以下に示す。

まず、当事者と学校と保護者の三者の目標を一致させることが必要である。その際、当事者の意向が尊重されるべきで、大人の一方的なニーズで展開してはならないことに意を配るべきである。

次に、家庭が取り組むべきことは、不登校をはじめとした現在状態を批判されないという心理的安全性の確保である。「家庭に安心していられるために言える大切なわがまま」を聴いてあげる姿勢が重要であり、子どもを家族にとって大切な存在、かけがえのない存在であると感じ続け、伝え続けることが重要である。安心した環境に身を置くことで、自分が今何に困っているかを自覚的に振り返ることができる環境が整うこととなる。「子どもは家でこそわがままであれ」というのは、子どもが内心に抱えている不安や不満を言いやすい環境整備を行うという意味である。

家庭教育の役割は、本人の人権を守ることと考えている。つまり、親でも侵害できない子の人権というものはあって、それは親こそが守ってあげなければならない。子の人権とは、有形無形問わず暴力を受けないこと、命の危険を感じている子どもに安心な場を提供すること、逃げてもいいと心から言ってあげること、そして親自身が暴力的に接しないこと。そして、自分の意志で生き方を決めること、親の意向に沿うのではなく、自分自身が自分自身の生き方を決めることをサポートすることが最大の人権保護である。

コーディネーター



米原由紀子 氏

経 歴 :
とやまアナウンスアカデミー主宰
元民放テレビ局アナウンサー

とやまアナウンスアカデミーでは子どもたちを対象に学校では学ばない「話し方」「伝え方」「聴き方」、基本の発声・発音から音読・朗読・スピーチ・プレゼン等のアナウンス力を育むプログラムを組むことにより、パーソナリティを大切に豊かな心を育む活動をしています。

この度、小松市分科会でコーディネーターを務めさせていただくことになり大変光栄に存じます。素晴らしいパネリストのみなさまから、多くの気づきと学びをいただけますようコーディネートさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

パネリスト



後藤 豊郎 氏

経 歴 :
平成24・26年度 関市立瀬尻小学校PTA会長
平成27～29年度 岐阜県PTA連合会副会長
平成30年度 関市PTA連合会会長
令和元～3年度 岐阜県PTA連合会会長
令和4年度 公益社団法人日本PTA全国協議会副会長
令和5年度 (7月～)
公益社団法人日本PTA全国協議会会長
令和6年6月～ 公益社団法人日本PTA全国協議会顧問

家庭は子供の生きる力の土台を育む場。PTAは、保護者と教師が共に学び、保護者同士が支え合い地域と連携する学びの共同体です。子供たちが未来に希望をもって歩めるよう、大人も学びを深め、平和で住みよい日本を、家庭・学校・地域の力で共に創っていきたいと思います。

パネリスト



横山 えり 氏

経 歴 :
札幌市立八条中学校PTA会長 4年目
1985年生 札幌出身

高校生、中学生、小学生3人の母。不動産会社を営みながら、事務所の一部を子ども食堂として開放しています。

3児の母とはいえ、時代の流れが速く、学校教育についても、家庭教育についても、毎年上書き修正をしながら自分も親として学ばなければならない立場です。

我が子に求めるばかりですが、元気に大きな病気もなく毎日過ごせているだけで親として子どもに感謝しています。

分科会では、どこまでのわがまを、わがまとして区分し、どこまでの受け皿容量でいいのか？を学びたいと思います。

下木 良子 氏



経 歴 :
公認心理師、特別支援教育士、臨床発達心理士
養護教諭専修、看護師
看護師として勤務後、養護教諭として小～大規模の小
中学校に32年間勤務。
2024年4月から
小中高等学校複数校でスクールカウンセラー
石川県委託のヤングケアラーカウンセラー

32年間、養護教諭として、保健室で『困り感』を持つ児童生徒たちと関わってきた。現在のスクールカウンセラーやヤングケアラーカウンセラーとしても、子どもたちから『困った時に思い出してもらえる存在』でありたいと思っています。

子どもたちが『答えの出ない悩み』を一人で抱えきれない際には、一緒に考え、その子なりの方法で『存える』時に、お手伝いできるような心がけています。